

## あなたへの「聖書メッセージ」 【使徒信条】

### ● コリント人への手紙 第一 15章1～11節

今回は、古今東西、クリスチャンあるいはキリシタンと言われてきた人たちが、信仰告白として唱和してきました「使徒信条」について、教えられたいと思います。

高山右近さんの頃、キリシタンの時代には、「けれど」と言っていましたよ。

### 使徒信条

我は天地の造り主(つくりぬし)、全能の父なる神を信ず。

我はその独り子(ひとりご)、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府(よみ)にくんだり、三日目に死人の内よりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審き(さばき)たまわん。

我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。

アーメン

今から2000年前、使徒たちがまだ生きていて、その働きをしていた頃のことを考えてみましょう。

伝統的なものとして、律法の教えをもとにした強力なユダヤ教が、絶大な力をもっていました。

「旧約聖書」という、まとまった形のものであったわけではありません。

パリサイ派・サドカイ派といった、伝統と偏狭な知識にこり固まった、ユダヤ教の宗教指導者たちが、実質、国や社会を支配していました。

そのような中に、〈メシア預言〉の成就として、イエス・キリストが誕生され、十字架の死と贖い(あがない)、そして、復活をなさったわけです。

しかし、ユダヤ教徒たち、その指導者たちは、イエス・キリストを、預言されていた、待ちわびていたメシア・救い主(すくいぬし)としては受け入れません。

使徒たち、初期のクリスチャン達の苦難は、言葉ではとても言い表せないほどの、それはそれは大変なものでした。

パウロは言います。

「牢に入れられ、むち打たれ、三十九度のむちを受け、死に直面し、石で打たれ、難船し、海上を漂い、幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」

以上のような、外側からくる苦難も大変なことですが、それ以上に、教会の内側からくる苦難は、精神的にもっと大変です。パウロは、続けて語っています。

「このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかる、すべての教会への心づかいがあります。」せっかく、福音を宣べ伝え、人々が救われ、喜んでいても、にせ預言者・にせ教師・異端が入ってきて、人々がそれに影響されてしまい、内側からくずされていってしまうのです。

パウロや使徒たちが、そのような中で、信仰の一致のために、神の靈感を受けて、書き記し、各教会で回し読みにされ、結果、残された手紙や記録がまとめられました。

それと共に、旧約の文書もまとめられて、1冊の本にして私たちに与えられているのが、「**聖書**」であるわけです。

私たちは、この「聖書」が与えられているおかげで、三位一体の主なる神について、天地創造について、罪からの救いについて、最後の審判と天国についてなど、いつも聖書に立ち返りながら、誤りなく、真理に立つことができるのです。

しかし、2000年前の、使徒たちの時代には、今のような形での「聖書」はなかったのです。

旧約聖書については、個々のものが、ばらばらの形で、写本されて、特別な場所にだけ、少しの数だけはあったでしょう。

しかし、当然のことですが、新約聖書については、まだ、形さえありませんでした。

ましてや、一般の人たちが今のように、手にすることなど、決して、ありえないことだったのです。

そういう中で、クリスチャン一人一人が、ゆるがされることなく、神のことば・福音のことばにしっかり立って、それを保ちつづけ、救いを全うするためには、どうしたらいいのでしょうか。

聖書はまだありませんし、手にすることは出来ません。ですから、別の方法を考えなくてはなりません。

そこで大切にされたことは、重要な教えを適確な、短い文章にまとめて、教理として理解を深めていくことでした。そして、それらを覚え、日々暗誦して、大切な真理を、しっかり自分たちのものにしていったのです。

パウロも、最初に記しましたみことば(コリント第一 15:1～11)の中で、「私が、あなたがたに、最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。」このようにいって、ここでは、キリストの復活のことについて記しているのですが、あとから、「使徒信条」に採り入れられている言葉を書き記していています。

「キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また葬られたこと、また、聖書の示すとおり、三日目によみがえられたこと」

ここで言われている「聖書」というのは、今私たちが手にしている形の「聖書」のことではありません。今の聖書の中にある「福音書」の写本が造られ、用いられていたのだと思われます。

「そういうわけですから、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣べ伝えているのであり、あなたがたは、このように信じたのです。」

苛酷な政治支配や迫害の嵐の中、又、ユダヤ教からの執拗な攻撃、巧妙なせしめ預言者やにせ教師たちのさまざまな働きかけ、「靈知」・グノーシスと呼ばれる強力な反対論、更には、三位一体を否定する異端が入りこみ、力を得ていきます。

そのような大変な状況がうずまく中で、クリスチャン達の一致のために、大きな働きをしてきたのが、一つは「主の祈り」であり、そしてもう一つは「使徒信条」であったわけです。

このようにして、聖徒たちは、靈的な一致を与えられて、キリスト教会は力を得ていきます。

そして、主イエス・キリストが、「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」とおっしゃった御言葉に対する、しっかりとした基礎が築かれていったのです。

ここで、時間を、いっきに1600年間、タイムスリップさせて、今から400年前の日本に目を向けてみることにしましょう。

使徒の時代に、その骨子ができていき、次第に、今のような形の本文にまとめられて、クリスチャン達によって信仰告白として、唱和されてきたのが「使徒信条」であるわけですが、実は、400年前の日本のクリシタン達も、この「使徒信条」を唱和して、信仰告白してきました。

高山右近も、細川ガラシアさんも、毎日のように、唱えてきたもの、それが「使徒信条」なのです。

当時は、「**けれど**」と言っていました。もともとの言葉が、ラテン語の「クレド」・意味は〈信ず / 信じます〉という言葉ですので、それが少しなまって「けれど」と呼ばれていたのです。

どのような言葉で、唱和していたのでしょうか。

右近さんやガラシアさんが、祈りとして、オラショとして唱和していた、400年前の当時の言葉で言ってみたいと思います。

当時のことばでは、・父なる神は、御おやデウス

・主イエス・キリストは、御(おん)あるじ ゼズ・キリシト

・聖霊は、スピリツサント

・おとめマリヤは、ビルゼンマリヤ

・教会は、エケレジャ などですが、

中身は、今のものと、まったくかわりませんので、途中とまらないで、そのまま、言ってみることにします。このようなものでした。

### クレド

- ・ 万事叶い給い、天地を造り給う御(おん)親デウスと
- ・ その御ひとり子、われらが御あるじゼズ・キリシトを、まことに信じ奉る。
- ・ この御子(みこ)、スピリツサントの御(おん)奇徳をもて、宿され給い、ビルゼンマリヤより生(む)まれ給う。
- ・ ポンショ・ピラトが下において、呵責(かしやく)を受け、こらえ、クルスにかけられ、死し給いて、御棺(みかん)に納められ給う。
- ・ 大地(だいち)の底へ降り給い、三日目(さんにちめ)によみがえり給う。
- ・ 天に上がり給い、万事叶い給う御親デウスの御右に、備わり給う。
- ・ それより、生きたる人、死したる人を糺(ただ)し給わんために、天降り給うべし。
- ・ スピリツサントを、まことに信じ奉る。
- ・ カタウリカ(公け)にてましますサンタエケレジャ(聖なる教会)、サントス、皆、通用し給う事。
- ・ とがの御ゆるし ・ 肉身、よみがえるべき事
- ・ 終わりなき生命とを、まことに信じ奉る。

そして、キリスト教教理を教える「**ドチリナ・クリシタン**」という本において、この「クレド・使徒信条」の中身をくわしく、問答形式で解説しているのです。

弟子がたずねます。「ただいまの**クレド**は、何ごとぞ。」

師(先生)が答えます。「信じ奉るべきヒイデス(信仰)の肝心の条々なり。」(大事なことの一つ一つのことです。)

弟子がたずねます。「クレドは、たれ人のつくり給うぞや。」(だれが作ったのですか。)

師が答えます。

「御主(あるじ)ゼズ・キリシトのアポストロたち(弟子たち)、スピリツサントの御導きをもって、一か所に集まり給いて、御主ゼズ・キリシトの御口(みくち)より、ぢきに聞き奉られたる旨を、連ね給うものなり。」

弟子いわく「何のために、つらね給うぞ。」  
師いわく「ヒイデス(信仰)にうけ奉るべき条々を、我等に教え給わんためなり。」

このようにして、教えが問答形式ですすんでいて、私が持っています本では、24ページにわたって、キリシタン達にくわしく教えるという目的で、記されていていきます。

400年前のキリシタン達は、この「ケレド」(使徒信条)だけではありません。  
「[バアテル・ノステル](#)」(主の祈り)、「[十\(とお\)のマンダメントス](#)」(十戒)、「[慈悲の所作](#)」(「マタイの福音書」25章で、主が語られた愛の実践の箇所)なども、日々くり返し、[オラショ](#)(祈り)として唱え、信仰を確認し、強められていったのでした。

彼ら、キリシタン達も又、2000年前の、使徒たちの頃と同じように、まとまった形での「聖書」を手には出来ませんでした。翻訳も、ごく一部分しかありません。

又、今のように、小学校・中学校といった学校が、あったわけではありませんし、ほとんどのキリシタン達は、文字を読むことはできなかったことでしょう。

しかし、彼らは、「使徒信条」や「主の祈り」「十戒」などを暗唱し、日々くり返しながらか、“何を信じているのか” “何をすべきか” “何をしてはいけないのか”、そうしたことがはっきりしていましたから、私たち現代のクリスチャンより、その信仰の歩みが、純粹で、明確でしたよ。

私は、高山右近やキリシタン達の信仰から学びながら、彼らの信仰は、[\[3S\]](#)(スリーエス・3つの S)という言い方でまとめられるのではないかと、思っています。

- ・ 彼らの信仰は、[Simple](#) でした。単純明解でした。
- ・ 彼らの信仰は、[Straight](#) でした。まっすぐな信仰でした。神のみこころが、こういうことだということを知り、示されたならば、即、行動に移していきました。
- ・ 彼らの信仰は、[Spiritual](#) でした。靈的でした。

そして、いつ生命が取り去られても仕方がないような、戦国の厳しい日常の中で、日々、天のパライゾ・天国をめざして、歩んでいたのです。

そういう彼らを通して、多くの人たちが、主に導かれていきました。

主なる神・デウスも、大きな祝福をもって臨んで下さり、宣教師たちの報告によりますと、当時2万5千人だった高槻の領民の内、1万8千人(72%)の人がキリシタンだったということです。

72%と言えば、10人の内7人がキリシタン・クリスチャンだったということです。

大いなる、神のみわざが行われたのは、2000年前の使徒たちの時代だけではありませんでした。

400年前の、ここ高槻の地、高山右近が城主だった頃の高槻の地で、大いなる、神のみわざがなされていったのです。

私たちも又、同じクリスチャンとして、同じ高槻にある教会として、同じ主・同じ神を信じ、仰いで、信仰の歩みをつづけていっているのです。

「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」

そのはずなのですが、同じ主を信じ、仰いでいるはずなのですが、でも、どうでしょうか？

彼らとは、何かが違うのでしょうか。

その何かを、祈り求め、示され、この地域で、この町で、この国で、[大いなる聖霊の働き・リバイバル](#)を体験させていただきたいものだと思います。

この国には、1億3千万人の人たちが、今日も、生命ゆるされ、生活しておられます。

その1/3の人たちは、子ども達や若者たちでしょう。

そして、そのすべての人たちが救われることを、神は望んでおられ、日々、いろいろな方法で、彼らの魂に語りかけておられるのです。

私たちも、主なる神様と共に働かせていただく者として、整えられていきたい、そして用いられていきたいと思います。

さて、今回は、皆さんに、タイムカプセルに乗っていただいて、四次元の世界を自由に行き来していただいているのですが、もう一度、1850年前の世界にもどっていくことにしましょう。

ここは、西暦150年頃の、イタリアのローマです。

今、一人の新しくクリスチャンになった兄弟が、バプテスマを受けようとしています。

洗礼のやり方は、〈浸礼〉(しんれい)です。

神父と、洗礼を受けようとしている兄弟が、腰まで水の中に入りながら、信仰を確認し、告白する時をもっています。

神父が、兄弟の頭上に手をかざしながら、たずねます。

「あなたは、全能の父なる神を信じますか？」

[「信じます。」](#)

「あなたは、神の御子・イエス・キリスト —このキリストは、聖霊によって処女(おとめ)マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに十字架につけられ、葬られ、三日目に死人の中よりよみがえり、天に昇り、父なる神の右にすわれ、生者(せいじゃ)と死者とをさばくために来られるお方なのですが、あなたは、神のひとり子、イエス・キリストを信じますか？」

[「信じます。」](#)

「あなたは、聖霊、聖なる教会、罪のゆるし、身体のよみがえりを信じますか？」

[「信じます。」](#)

この問いと答えの後、彼は水の中に全身を沈められ、起こされて、洗礼を終わっていったのです。

私たちが、今用いています「使徒信条」の本文は、ローマや各地で用いられていました、洗礼前や洗礼の時に、洗礼志願者に対して確認された、〈父なる神・子なる神・聖霊なる神〉に対する、三つの質問がもとになっているわけです。

このような、父・子・聖霊なる神に対する信仰の告白は、ローマやコリントやガラテヤ、エペソなど、異邦人の地に建てられたキリスト教会にとって、決定的に重要な意味をもっていました。

といいますのは、クリスチャンになった異邦人たちは、それまで、ローマの神々やギリシャの神々、エペソのアルテミス神などを信じていたのであって、それらの神々への信仰 / 偶像礼拝から離れて、天地の創造主・全能の唯一の神を信じる、ということは、彼らにとっては、まったく新しい体験でしたし、決断であったのです。

この、洗礼の時の告白文が、ふだんも信仰告白として用いることが出来るように、まとまった文章として整えられていきました。

ローマ教会で、洗礼告白文として用いられたものが基になっていますので、一般に「[ローマ信条](#)」と呼ばれています。

「ローマ信条」と「使徒信条」とを比べてみますと、「ローマ信条」の全文が、そのまま「使徒信条」に字句どおりに、含まれています。

「使徒信条」は「ローマ信条」に、若干の補足がなされたものである——ということが出来ます。

私が、今から「[ローマ信条](#)」を唱えてみますので、どこが「使徒信条」と違っているのか、注意して聞いてみてください。

### ローマ信条

- ・ 我は、全能の父なる神を信ず。
- ・ 我は、その独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。
- ・ 主は、聖霊と処女（おとめ）マリヤとより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに十字架につけられ、葬られ、三日目に死人の中（うち）よりよみがえり、天にのぼり、父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死にたる者とを、さばきたまわん。
- ・ 我は、聖霊を信ず。聖なる教会、罪のゆるし、身体のよみがえりを信ず。      アーメン

アレ？！ どこが違ってたん？ と思われた方も、あるのではないのでしょうか。

「使徒信条」として補足されましたのは、“天地の造り主”とか、“死にて”とか、“陰府（よみ）にくだり”とか、“永遠（とこしえ）の生命（いのち）”とか、全部で9か所です。

でも、本質的な事柄は、すべて「ローマ信条」に含まれています。

「使徒信条」が「ローマ信条」を基にして、まとまった形のものとなり、クリスチャン達に暗唱され、唱えられていきますが、この時点では、〈父・子・聖霊〉が信仰告白の中心になっていますが、まだ、〈[三位一体](#)〉（さんみいったい）という言葉や考え方は、含まれてはいません。

そういう間隙（かんげき）をぬって、巧妙に異端が侵入してきます。

まもなく、アリウスなる人物があらわれて、「子なるキリストと父なる神は、同一の本質ではない。」と強く主張し、多くの人たちに影響を与えていきました。

この問題に決着をつけるために、西暦325年に、「[ニケア会議](#)」という会議が、ローマのコンスタンチヌス大帝によって召集されます。

そして、大論争の結果、キリストが、父なる神と〈同一の本質〉（[ホモ ウシオス](#)）であることが確認されて、アリウスとその一派の主張を異端として退け、破門にしていきます。

そして、「使徒信条」を更にくわしくし、〈三位一体〉の神であることも明確にした、もう一つの大事な信条である「[ニケア信条](#)」が、制定されていったのでした。

あのベートーヴェンが、有名な「[ミサ・ソレムニス](#)」（[荘厳ミサ曲](#)）を作曲しています。

その中で、キリエ・グロリアにつづいて、クレドが22分間、歌われていきます。

バッハにも、名作「[口短調ミサ](#)」があります。その中で、同じく、クレドとして、37分間にわたって歌われていくのですが、ベートーヴェン・バッハの2曲とも、ここで歌われる〈クレド・信仰箇条〉は、「[ニケア信条](#)」に曲がつけられたものです。

このような経過をたどりながら、重要な働きをしてきた「使徒信条」だったわけですが、中世になって、教会が墮落していくとともに、「使徒信条」も形だけのものになり、以前のように、用いられなくなっていってしまいます。

そのような「使徒信条」に、再び生命(いのち)を吹き込み、力を与えていったのは、宗教改革者である、マルチン・ルターや、カルヴァンと言われる人たちでした。

ルターは、ドイツ各地の教会の実情を見て回るのですが、そこでルターが、目(ま)の当たりにしたのは、教会の嘆かわしい現状だったのです。  
(聖餐式)(せいさんしき)は、長い間、執り行われてはいませんでしたし、民衆だけではなく、牧師ですら、「十戒」も、「主の祈り」も、「使徒信条」も唱えることが出来ませんでした。

そこで、ルターは、2つの教理問答書・「大教理問答」と「小教理問答」の、2冊の本を書きあらわして、主の祈りや使徒信条や十戒などについて、平易な言葉で、民衆や若い人たちのために記していったのです。

ルターは、「十戒」では、人間の罪を自覚させ、「使徒信条」では、その罪を救う三位一体の神のみわざを示し、「主の祈り」では、恵みの客観性と、それへの信頼を教えていきました。

カルヴァンも、「ジュネーヴ教会信仰問答」という本を書きあらわして、373の多くの質問に対して、それに答える形で、わかりやすく教えています。

その中の最初の方、問15～問110までの96の質問が、「使徒信条」に関するものです。  
信仰問答が始まって、すぐ、大事なものとして、「使徒信条」が取り上げられているのです。

問15に対する答えとして、次のように教えています。  
答え「使徒信条は、教会の初めの時以来、すべての敬虔な人たちの間で、つねに受け入れられて来ました。これは、使徒たちの口から伝えられたか、もしくは、その文書から、忠実に集められたものなのです。」このように教えています。

カルヴァンがいうように、「使徒信条」は、教会の初めの時以来、すべての敬虔な人たちの間で、つねに受け入れられて来たものです。

そして、「使徒信条」には、使徒パウロが言うように、「あなたがたに、最もたいせつなこと」として伝えたかったものが、含まれているのです。

以上、私たちが、〈信仰告白〉として唱和しています「使徒信条」について見てきたのですが、「主の祈り」が、祈りの中の祈りであり、「十戒」が、律法の中の律法であるように、「使徒信条」は、信条の中の信条です。

そこには、救いに必要な、キリスト教信仰の根本的要素のすべてが、事実の形で、単純な聖書のことばでもって、しかも最も自然な順序で、神と創造から、復活と永遠のいのちに至るまでが語られています。

今まで生み出された数ある信条の中で、「使徒信条」は最高のものであり、聖書それ自体をのぞけば、最も広く受け入れられてきた、キリスト教信仰の要約です。

多くの人々が、長い間、1800年近く、これを唱えてきました。それは、あらゆる時代の、あらゆる文化の、あらゆる国や人種のクリスチャンたちを、結びつけてきたものです。

私たちは、この「使徒信条」を、いつも心の中にしっかりと持ちながら、礼拝の時だけではなく、朝に夕に、くり返し、声に出して、告白するようにしたいものだと思います。

ひとこと、お祈りをいたしましょう。

我は、天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我は、その独り子、我らの主イエス・キリストを信ず。我は、聖霊を信ず。

三つにして一つなる、主なる神さま。私たちが、このような信仰告白をできる者としておってくださることを、ありがとうございます。

私たちの主、私たちの神であられるイエス・キリストの御名(みな)によって、お祈りします。

アーメン